

「研究論文」

小学生の学校および家族生活ストレスに関する縦断的研究

谷口弘一（教育学部人間発達講座）

Abstract

At the beginning, the middle, and the end of a school year, 124 sixth-year elementary school students completed questionnaires regarding school and home stressors (school work, friends, teachers, and parents) and stress responses (irritated-angry emotion, depressive-anxious emotion, cognition-thought of helplessness, and physical response). For school and home stressors, teacher stressor was higher at the end of the year than at the beginning, parent stressor was higher at the middle of the year than at the end, and school work stressor among girls was higher at the middle of the year than at the beginning. For stress responses, irritated-angry emotion among boys was higher at the middle and the end of the year than at the beginning.

Key words: school and home stressors, stress responses, elementary school students.

問題と目的

本研究の目的は、小学生を対象にして、学校および家族生活のストレスとストレス反応の1年間にわたる時系列的な変化を検討することである。

Brown & Armstrong (1982) は、中学校の女子新入生を対象にした縦断的研究により、1学期から2学期にかけて、友人関係のストレスを経験する生徒の割合が減少する一方で、学業のストレスを経験する生徒の割合が増加することを明らかにした。また、Cotterell (1982) は、中学入学後3週間のあいだで、授業に対する不安が増加すること、また、環境全般や対人関係に対する不安には時間的変化がほとんど見られないことを見いだした。

心身の健康状態や学校適応過程の時系列的変化について、Hirsh & Rapkin (1987) は、中学校入学後半年から一年の間に、自尊心が上昇する一方で、学校満足感、授業への関与、教師への肯定的態度が低下することを示した。我が国では、耳塚・荻谷・濱名・庄 (1983) が、教師関係を主とした学校生活状況が中学1年の6月まで上昇し、6月から11月にかけて悪化したあと、再度、2年から3年にかけて上昇すること、授業の理解度が1年から2年にかけて低下することを見いだした。

ストレスと心身の健康状態を同時に扱った三浦・坂野 (1996) は、中学1年生から3年生を対象にして、4月から7月の1学期間における学校ストレスとストレス反応の変化を検討した。その結果、学校ストレスに関しては、

学業ストレスの経験頻度が5, 6月に高くなること、また、友人関係ストレスの経験頻度が6月以降低くなることをそれぞれ見いだした。ストレス反応に関しては、学年によって時系列的变化の特徴が異なっていた。1年生は、4月から5月にかけてストレス反応が低下していた。2年生は、4月に不機嫌・怒り感情や無気力反応が高く、6月に身体的反応が高くなっていた。3年生は、4月から7月までの4か月間を通して、ストレス反応がほぼ変化することなく一定であった。

三浦・坂野(1996)の研究は、4月から7月の4ヶ月間という比較的短期の時系列的变化を示したものである。それに対して、谷口(2008)は、中学・高校新入生を対象にして、1学期から3学期の1年間にわたる学校および家族生活ストレスとストレス反応の時系列的な変化を検討した。ストレスに関しては、中・高校生ともに、学業ストレスが入学後半年ほど経過した時点で多くなること、また、教師ストレスが学年の後半になって増加することが示された。ストレス反応に関しては、中学生では抑うつ・不安が、高校生では不機嫌・怒り、抑うつ・不安、無気力、身体的反応が、年間を通して時間の経過とともに上昇していた。

本研究では、小学生を対象にして、谷口(2008)と同様に、1学期から3学期の1年間にわたる学校および家族生活ストレスとストレス反応の時系列的变化を検討した。

方法

調査参加者と調査手続き

公立小学校の6年生124(男子57名、女子67名)が調査に参加した。各学級担任の先生が、ホームルームや放課後の時間を利用して調査を実施した。調査は、1学期(6月中旬～7月中旬)、2学期(12月初旬～中旬)、3学期(3月中旬)の計3回にわたって行われた。

調査内容

調査用紙には、フェイスシートに記載された回答者の個人的属性を質問する項目の他に、以下に挙げる尺度が含まれていた。3回の調査とも、同一の尺度が使用された。

学校および家族生活のストレス 三浦・福田・坂野(1995)が作成した中学生用学校ストレス測定尺度を用いた。この尺度は、学業、教師との関係、友人との関係、部活動の4つの下位尺度から構成されている。本研究では、部活

動を除く3つの下位尺度について、因子負荷量を考慮の上、各5項目ずつ合計15項目を採用した。この他に、小・中・高校生を対象にした自由記述による事前調査をもとに、親との関係のストレスを測定する項目を作成し、新たに5項目を追加した。全20項目に対して、最近数ヶ月間の経験頻度を4件法（1＝全然なかった～4＝よくあった）で評定させた。下位尺度ごとに各項目の得点を合計してストレス得点を算出した。得点が高いほどストレスの経験頻度が高いことを示す。 α 係数は、1回目から3回目の順に、学業が.77, .75, .79, 教師との関係が.84, .81, .88, 友人との関係が.70, .78, .83, 親との関係が.84, .82, .79であった。

ストレス反応尺度 三浦・福田・坂野（1995）によって作成された中学生用ストレス反応尺度の中から、因子負荷量を考慮して、4つの下位尺度（不機嫌・怒り、抑うつ・不安、無気力、身体的反応）から各5項目ずつ計20項目を選択して用いた。調査参加者は、各項目によって示されている気持ちや体の調子が、最近の自分にどの程度当てはまるかに基づいて、4件法（1＝全く違う～4＝その通りだ）で評定を行った。下位尺度ごとに各項目の得点を合計してストレス反応得点を算出した。得点が高いほどストレス反応の程度が高いことを示す。 α 係数は、1回目から3回目の順に、不機嫌・怒りが.87, .90, .91, 抑うつ・不安が.85, .89, .87, 無気力が.84, .84, .85, 身体的反応が.81, .83, .81であった。

結果と考察

学校および家族生活ストレスの時系列的变化

各下位尺度に対して、測定時期（1, 2, 3学期）×性別（男, 女）の2要因分散分析を行った（Figure 1）。その結果、教師との関係および親との関係の2つのストレスにおいて、測定時期の有意な主効果が認められた（教師： $F(2, 190) = 9.14, p < .01$ ；親： $F(2, 186) = 3.44, p < .05$ ）。多重比較の結果、教師との関係では1学期（ $m = 8.78$ ）よりも3学期（ $m = 10.15$ ）の得点が高かった。親との関係では3学期（ $m = 9.16$ ）よりも2学期（ $m = 9.91$ ）の得点が高かった。学業のストレスでは、測定時期と性別の交互作用効果が有意であった（ $F(2, 182) = 3.79, p < .05$ ）。下位検定の結果、女子において、1学期（ $m = 10.35$ ）よりも2学期（ $m = 11.38$ ）の得点が高かった。教師との関係ならびに学業のストレスにおけるこうした時系列的变化は、中学・高校進学時の児童・生徒の学校適応過程を検討した先行研究（Brown & Armstrong, 1982; Hirsch & Rapkin, 1987; 耳塚・荻谷・濱名・庄, 1983, 谷口, 2008）の結果とほぼ一致している。小学6年生においても、中学・高校新入生と同様に、学業に関する不安や心配事は進級後半年ほど経過した時点で多くなること、また、教師との関係に関する不安や心配事は学年の後半になって増加することが示された。

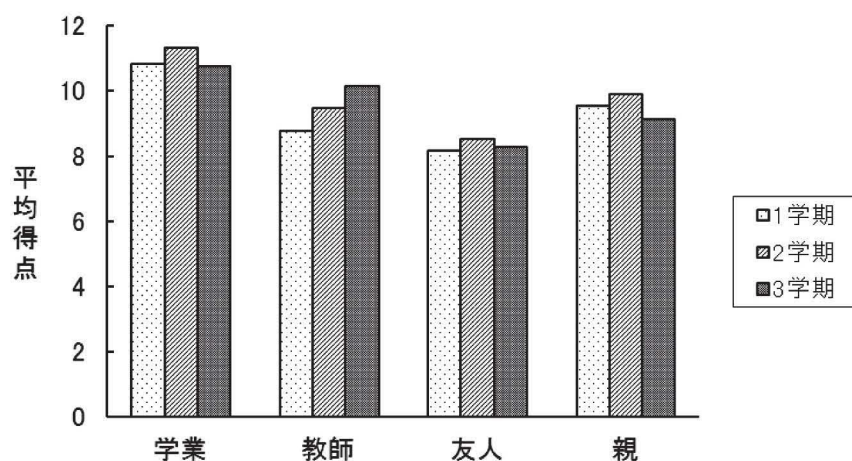


Figure 1 スレッサーの時系列的変化

ストレス反応の時系列的変化

各下位尺度に対して、測定時期（1, 2, 3 学期）×性別（男, 女）の 2 要因分散分析を行った（Figure 2）。その結果、不機嫌・怒りにおいて、測定時期の主効果（ $F(2, 196) = 4.23, p < .05$ ）ならびに測定時期と性別の交互作用効果（ $F(2, 196) = 6.83, p < .01$ ）が有意であった。下位検定の結果、男子において、1 学期（ $m = 9.25$ ）よりも 2, 3 学期（ $m = 11.94$ and 11.79 ）の不機嫌・怒り得点が高かった。時間の経過にともなう不機嫌・怒りの増加は、高校新生を対象にした谷口（2008）においても同様に確認されている。先に示したスレッサーの時系列的変化に関する分析結果を踏まえると、小学生では、教師との関係におけるスレッサーの増加が、男子の不機嫌・怒り感情の表出を増大させている可能性が考えられる。

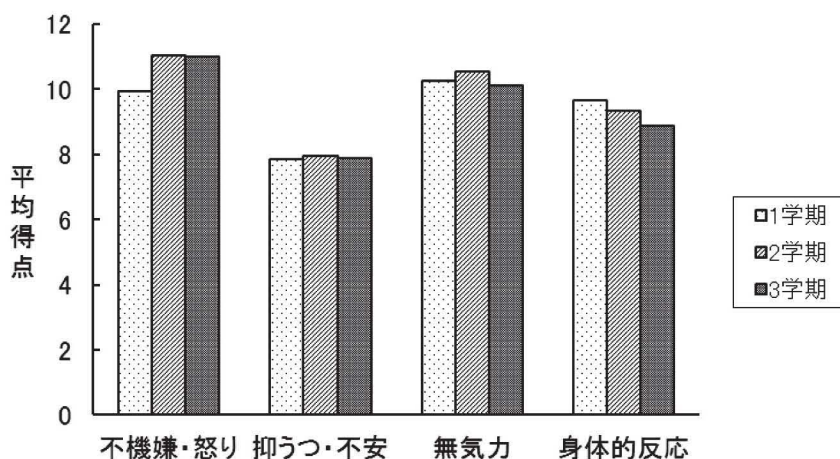


Figure 2 ストレス反応の時系列的変化

引用文献

- Brown, J. M., & Armstrong, R. (1982). The structure of pupils' worries during transition from junior to secondary school. *British Educational Research Journal*, **8**, 123-131.
- Cotterell, J. L. (1982). Student experiences following entry into secondary school. *Educational Research*, **24**, 296-302.
- Hirsch, B. J., & Rapkin, B. D. (1987). The transition to junior high school: A longitudinal study of self-esteem, psychological symptomatology, school life, and social support. *Child Development*, **58**, 1235-1243.
- 耳塚寛明・苅谷剛彦・濱名陽子・庄 健二 (1983). 小・中学校における学校生活の変容過程に関する継時的研究 (I) 東京大学教育学部紀要, **23**, 77-100.
- 三浦正江・福田美奈子・坂野雄二 (1995). 中学生の学校ストレスとストレス反応の継時的変化 日本教育心理学会第36回総会発表論文集, 555.
- 三浦正江・坂野雄二 (1996). 中学生における心理的ストレスの継時的変化 教育心理学研究, **44**, 368-378.
- 谷口弘一 (2008). 中・高校生の学校および家族生活ストレスに関する縦断的研究 同志社心理, **55**, 241-245.